

N I C U における長期入院患者の現状

(分担研究：ハイリスク児の管理に関する研究)

研究協力者 近 藤 乾

要 約： N I C U における長期入院患者の影響を検討するため、長期入院患者の全入院患者に占める比率、ベッドの占床率、基礎疾患を調査した。調査期間中の長期入院患者は17名で、全体に占めるベッド占床率は34.5%であった。基礎疾患別内訳では、先天異常のものほど長期化する傾向があった。

見出し語： N I C U、長期入院患者、ベッド占床率、先天異常

目 的

N I C U における長期入院患者の増加が指摘されている。これら長期入院患者がN I C U の運営に及ぼす影響を明らかにするため、長期入院患者の全入院患者に占める比率、ベッドの占床率、基礎疾患を調査した。

対象と方法

平成3年1月1日から平成4年12月31日の間にN I C U に滞在した患者を対象とした。ただし、先天性心臓病の患者は除外した。調査期間中にN I C U 滞在期間が100日以上のもを長期入院患者とした。

結 果

調査期間中にN I C U に在室した患者で、心臓病を除く272名を調査対象とした。延べ入院日数は11760日(平均43.2日)、長期入院患者は17名で、延べ入院日数は4059日(平均238.8日)であった。全入院患者に占める長期入院患者のベッド占床率は34.5%であった。(表1)

基礎疾患別内訳では、超未熟児が8名と最も多

かったが、1名を除き全例5ヶ月以内に退院できた。6ヶ月以上の入院は重症仮死の1名以外は全て先天異常に基づくものであった。

考 察

N I C U における長期入院患者の増加が問題となっている。われわれの施設では長期入院患者の構成率は6%であったがベッド占床率は34.5%に達していた。基礎疾患別にみると超未熟児が多かったが、ほとんどが100~150日の間に退院可能であった。これに対し先天異常を有する患者は入院が長期化する傾向にあった。

すなわち、超未熟児は入院時重症で手もかかるが、急性期を脱すると次第に状態も安定し時間は要するものの退院のめどもたってくる。これに対し先天異常では、急性期にそれほど重症ではないが最初から入院の長期化が予測され、一定期間経たのちも重症度は軽減せずに退院の予測も困難であった。

すなわち、最重症例の救命率の向上がN I C U における入院の長期化の最大の要因ではないことが明らかとなった。

表1 全入院患者に占める長期入院患者の割合

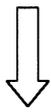
全入院	273名	延べ入院日数	11760日	1人平均	43.2日
(先天性心臓病98名を除く)					
死亡	24名				
長期入院	17名	延べ入院日数	4059日	1人平均	238.8日
長期入院延べ日数/全入院延べ日数×100=34.5%					

表2 長期入院患者の基礎疾患別内訳

超未熟児	8 (うち慢性肺障害3名)				
		197日	156日	114日	100日 104日
		105日	104日	112日	
極小未熟児	3				
	慢性肺障害			1	91日(106生日退院)
	食道閉鎖			1	174日(入院中)
	横隔膜ヘルニア			1	159日
骨系統疾患	2				
	ビールズ症候群			1	249日
	campomelic dysplasia			1	731日(3歳入院中)
先天性水疱症	1				
					654日(2歳7ヶ月時退院)
全前脳症	1				
					401日
先天性肺胞					
低換気症候群	1	269日			
重症仮死	1	339日			



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約: NICU における長期入院患者の影響を検討するため、長期入院患者の全入院患者に占める比率、ベッドの占床率、基礎疾患を調査した。調査期間中の長期入院患者は 17 名で、全体に占めるベッド占床率は 34.5%であった。基礎疾患別内訳では、先天異常のものほど長期化する傾向があった。